慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	英国水彩風景画家ポール・サンドビー : 1800年前後の評価
Sub Title	Notes on Paul Sandby's reputation around 1800
Author	桐島, 美帆(Kirishima, Miho)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学アートセンター年報/研究紀要 (Annual report/Bulletin : Keio University Art Center). Vol.28(2020/21), ,p.158- 164
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究紀要 研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11236660-00000028-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

[研究ノート]
英国水彩風景画家ポール・サンドビー
—— 1800 年前後の評価

桐島　美帆
所員、講師（非常勤）

西洋近代美術史において、水彩画が一つの自立した芸術としてみなされるまでの過程は簡単なものではなかった[*1]。水彩はその細部描写と速写性の点で優れ、油彩よりも取り扱いが簡便であることから、動植物の記録や地図製作などに多く用いられてきたが、芸術の領域においては、油彩を頂点とするヨーロッパの伝統的なヒエラルキーにおいて、長らく副次的な媒材とみなされてきた。水彩が芸術領域で一早く市民権を持つのは、英国においてである。その要因は様々あるが、他のヨーロッパ諸国に比べて美術アカデミーの設立が 1768 年と遅く、他国ほど絶対的な権威を持たなかったことは大きな要因の一つと言える。さらにグランド・ツアー（大陸周遊旅行）や国内の名所をめぐるピクチャレスク・ツアーの流行による土地の記録の需要、産業革命による画材の改良や市民社会の成熟と娯楽の拡大などが後押しし、水彩による風景画が急速に隆盛し、広範囲に普及した。そして 1804 年に水彩画家だけで組織される「水彩画家協会 Society of Painters in Water Colours」が設立されたことは、英国水彩画隆盛の展開において象徴的な出来事である[*2]。この 18 世紀半ばから 19 世紀初頭という英国水彩風景画にとって重要な変革が起こった時期に、そのおよそ 65 年にわたる長いキャリアを重ねているのが、画家ポール・サンドビー（Paul Sandby, 1731–1809）である。

サンドビーはこれまでしばしば「英国水彩画の父」と呼ばれ、水彩画での試みや地誌的風景画を版画によって広く普及させたことで知られている。また、水彩による風景画というアカデミーのヒエラルキーにおいて低い位置づけにあった分野を専門とする画家でありながらロイヤル・アカデミーの創立メンバーであるという、興味深い経歴をもつ。さらに、上流階級層や博物学者、詩人など、同時代の教養人と広く交流をもち、美術以外の様々な分野との接点も多い[*3]。それゆえ筆者は、ポール・サンドビーの活動を具体的に見ていくことは、美術アカデミーと並走しつつ、同時期の英国のあらゆる事象を反映し複合的に発展してきた英国の水彩画を考察するにあたり、一つの切り口に、あるいは一つの重要な事例になると考える。

サンドビーに関する先行研究は多くはないものの、後述するように、着実に研究が積み重ねられている。近年は再評価の機運が高まり、重要な展覧会が開催され、カタログレゾネの刊行も進んでいる。そこでは「英国水彩画の父」と繰り返し呼ばれることで、その位置づけと活動が単純化されていたことへの反省がみられる。そこで本稿では、まずポール・サンドビーの研究動向を概観し、「英国水彩画の父」と呼ばれ

始めた1800年前後の記述を、時代背景と照らし合わせながら整理したい。

ポール・サンドビー

ポール・サンドビーは、英国のノッティンガムに生まれた。ロンドン塔の軍事製図局に勤め、その間スコットランドハイランド地方の軍事測量に製図担当として従事するなど地図製作からキャリアを始め、そこで膨大な風景スケッチを行う。その後カンバーランド侯爵のもとでウィンザー・パークの副監守をしていた兄のトマス・サンドビー（Thomas Sandby, 1721–98）を頼ってウィンザーへ赴き、王室の素描教師となる。この時期にサンドビーはウィンザー・パークの豊かな自然に触れて風景を繰り返し描き、風景描写を磨いてゆく。再びロンドンに戻って芸術家協会（Society of Artists）の結成に携わり、その後1768年、ロイヤル・アカデミーの創立メンバーとなる。ロイヤル・アカデミー創立メンバーのうち風景画家はリチャード・ウィルソン（Richard Wilson, 1714–82）とトマス・ゲインズバラ（Thomas Gainsborough, 1727–88）、ポール・サンドビーの3人であり、そのうち水彩画家はサンドビー1人である。同年ウーリッジで王立陸軍士官学校（Royal Military Academy）の素描科主任となる。1770年代には、随行画家としてイングランド人にとって未知の土地であったウェールズを旅し、ウェールズを主題とした一連の版画をアクアチントで制作する[*4]。サンドビーはアクアチント技法を英国で初めて本格的に用いた画家といわれている。生涯を通して英国各地の風景を描き、地所の肖像としての風景画も多く手がけた。土地所有は18世紀英国において、経済的豊かさ、社会的地位、政治的権威の基盤であったため、地所の肖像画はその邸宅、庭園、動植物など、所有地のさまざまな自然物・人工物を詳細に記録し、その行き届いた管理や生産性、調和を示す役割を担っていた。またこの時期は当時を代表する造園家ウィリアム・ケント（William Kent, 1685–1748）やランスロット・「ケイパビリティ―」ブラウン（Lancelot 'Capability' Brown, 1716–83）、ハンフリー・レプトン（Humphry Repton, 1752–1818）などに依頼して土地改良（improvement）を行うことが富裕層を中心に流行し、地所の肖像たる風景画は需要があった。サンドビーはスコットランドやウィンザー、ロンドンでの交流から広い人脈を築き、また生涯ロイヤル・アカデミーへ多くの水彩画や版画を出品し続けながら、素描教師としても多くの後進を育てた[*5]。

以上は経歴の概略のみだが、このように、サンドビーは水彩画家、アカデミシャン、素描教師など、さまざまな立場で、美術の中心地ロンドンと郊外の双方で活躍した。そして絶えず実験精神を持って水彩や版画技法の新しい試みを実践しながら、移り行く英国の風景や人物を豊かに、細やかに描きとめた画家であった。

先行研究

まずサンドビーの個別研究において主要な先行研究を確認し、その流れを概観しておきたい。サンドビーに関する最初の著作は、甥であるウィリアム・アーノルド・サンドビーによるポールとトマス・サンドビーの伝記である[*6]。この著作はサンドビー兄弟の生涯や技法、死後のコレクションの在り方等について詳細に記録しており、サンドビー自身による記録が少ないこともあって、重要な資料である。その他1940年代から1970年代にかけてはサンドビーとパトロンについての論文[*7]や3つの展覧会[*8]がもたれたが、いずれもサンドビーの作品の部分的な紹介にとどまっている。この時期で最も重要な研究はA. P. オッペの著作[*9]である。オッペはサンドビー作品を数多く所有するウィンザー王室コレクション所蔵のサンドビー作品について網羅的にまとめ、サンドビー研究の端緒を開いた。1980年代には、サンドビーの多様な制作活動に目を向ける展覧会が開かれ[*10]、1985年にはジョンソン・バルがポールとトマス・サンドビーの家族やアカデミー会員とのつながりを詳細にまとめ[*11]、その翌年にはルーク・ヘルマンがヴィクトリア・アンド・アルバート美術館所蔵のコレクションで年代順のモノグラフを著した[*12]。このモノグラフによって初めてサンドビーの業績が年代順に俯瞰できたといえる。サンドビーの初期水彩画に関する詳細な研究は1987年のブルース・ロバートソンの博士論文によって初めてなされた[*13]。1995年から1997年には、ジェーン・ロバーツによって、ウィンザーを主題としたサンドビー作品に焦点を当てた展覧会が開催された[*14]。このように、20世紀までの研究は各所蔵先のコレクションを中心としたものであったが、21世紀に入ると研究成果を反映させた一層充実した展覧会が開催された。1つは、2006年にイェール英国芸術センターで行われた展覧会「18世紀英国における製紙と水彩――ポール・サンドビーとワットマン製紙工場」[*15]である。同展覧会は2002年度に同センターが購入した《ヴィンターズの眺め》について行われた作品調査の成果を発表したもので、英国水彩画史と当時の産業の中に本作品を位置づけた意義深い研究である。そしてもう1つは、2009年から2010年にかけて行われた没後200年の回顧展「ポール・サンドビー――英国を描く」[*16]である。同展覧会

はジョン・ボンヒルによって、サンドビーの画業全体にわたる多様な活動を、幅広いジャンルの作品から検証し、包括的に扱った画期的な展示となった。2015年には版画のカタログレゾネが刊行され、サンドビーの版画作品の全貌を初めて通覧することが可能になった*17。また、個別研究ではないが、2017年には地誌に関する素描、絵画、地図などの大英図書館のコレクションがオンラインで公開され、サンドビー研究に関してもさらなる一歩となった*18。2020年には、サンドビーの2作品を取り上げてピクチャレスクの関係から論じられた*19。

1800年前後の評価――「英国水彩画の父」の誕生

『英国水彩画家辞典1920年まで』（2002年）のサンドビーの項目を見ると、第一文は次のように始まる。サンドビーは「しばしば誤解を招きそうなほど『英国水彩画の父』と呼ばれてきた*20」と。以下では、先行研究での整理を踏まえ、サンドビーが「英国水彩画の父」と呼ばれるようになる前後の記述をいくつか取り上げて紹介する*21。

1796年に発刊された『ヨーロピアン・マガジン』8月号では、サンドビーの経歴が2ページにわたって紹介され、次のように記された。

> ……忠実さと趣味を兼ね備えた彼の精緻な描写において、この島［ブリテン］が際立っているその美しい風景が鏡のように映し出されている。力強さ、鮮明さ、そして透明感において、彼の水彩画に匹敵するものは未だ無いと言っても過言ではない。作品に頻繁に登場する城、廃墟、橋などの景観は、原物が朽ち果て、塵となっても、芸術、芸術家、そして国の栄誉を称える記念碑として残るだろう*22。

この記事が書かれた18世紀末、英国ではすでに多くの水彩画家が活躍していたにもかかわらず、ここではサンドビーの水彩画に非常に高い評価が与えられている。注目されるのは、サンドビーの水彩画の魅力と「英国の」風景とが結びつけられて語られていることである。こうした記述から思い起こされるサンドビーの作品として、例として《ウェンロック修道院、シュロップシャー 北翼廊側から見た南翼廊と改築された修道院長舎》（fig.）を挙げておきたい*23。本作品はサ

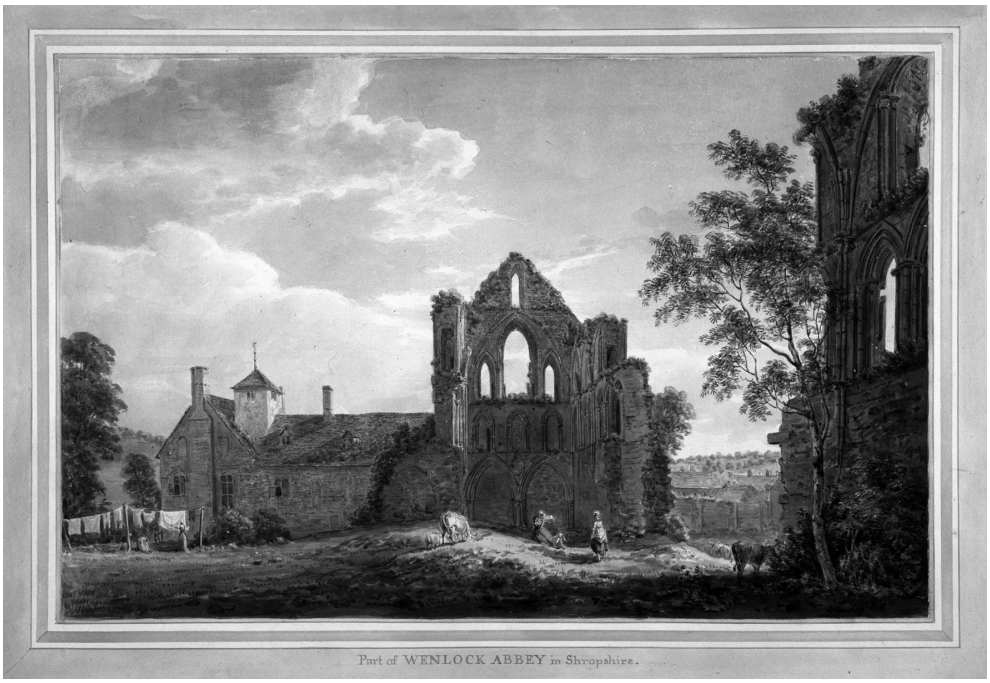

fig. ポール・サンドビー《ウェンロック修道院、シュロップシャー 北翼廊側から見た南翼廊と改築された修道院長舎》1779年以前 レイド紙に鉛筆、水彩 ロイヤル・アカデミー、ロンドン

© Photo: Royal Academy of Arts, London. Photographer: Miki Slingsby. Fine Art Photography.

ンドビーの主要な顧客の一人であった第四代准男爵ワトキン・ウィリアムズ・ウィン卿（Sir Watkin William Wynn, 1749–89）によって注文されたもので、ウィン卿が所有していた土地の一角に建つウェンロック修道院の廃墟が描かれている。廃墟に繁茂する植物は長い時間を想起させ、周辺で生活を営む人々の現在の時間と対比的に描かれる。暗い前景、地面中央に落とされたスポットライト、透明水彩で薄くのびやかに塗られた清澄な空の効果によって、廃墟のある風景が壮麗に描き出されている。ジョン・ボンヒルが指摘するように、サンドビーの作品は、史跡や同時代の建築、地誌を通して英国や英国らしさを表すことへの幅広い関心の一部として見ることができる*[24]。

サンドビーと英国性を結びつける記述は同時期に他にも見られる。たとえば1801年、「同時代の伝記」となることを意図した雑誌『パブリック・キャラクターズ』第3巻では、貴族階級の人物や作家、医師、政治家などの著名人と並びサンドビーが取り上げられた。そこではサンドビーが英国の風景をよく見ることで、英国固有の様式を形成したと語られる。

> この大英帝国に溢れる多様な風景を頻繁に静観することで、彼独自の、そして英国固有の様式を形成した。そして、この国の芸術家と愛好家の間で、趣味と才能に対して高い評価を正当に受けている*[25]。

対外戦争、とりわけフランスとの戦争等により、ナショナリズムの機運が高まる時代にあって、サンドビーの風景画は「英国的」である点において高く評価された*[26]。そしてサンドビーの没後、1809年の『ロンドン・レビュー・アンド・リテラリー・ジャーナル』の訃報記事には次のように掲載された。

> パディントンにて、ロイヤル・アカデミー会員ポール・サンドビー殿、84歳。彼の死は、その高齢にもかかわらず、芸術にとっての損失であり、生前彼と知り合うことのできた者はその死を惜しむだろう。彼は、水彩による近代風景画の父であった。彼はその種の絵画が可能な限り、あるいは適切に進むべきところまでその絵画を推し進めたのである*[27]。

水彩風景画の父と称されたこの呼称は、現在に至るまで繰り返し用いられ、定着することとなる。似た記述は、ルドルフ・アッカーマンにより刊行された、芸術、文学、ファッション、政治など幅広い分野を扱う雑誌『リポジトリー・オブ・アーツ』にもみられる。本誌は創刊（1809年）以来、水彩画家協会および水彩画家連盟（The Society of Associate Painters in Water-Colours）の展覧会評を掲載しているが、そこではポール・サンドビーを「風景画における水彩画様式のイングランドでの発明者*[28]」と称し、J.M.W. ターナー（Joseph Mallord William Turner, 1775–1851）が更なる高みへ引き上げたと語られている。リチャード・ハーンは「19世紀初頭の水彩画家たちが自分たちの芸術の父としてアカデミー会員であるサンドビーを選んだことは社会的ステータスの点から重要な意味があった*[29]」と指摘しているが、アカデミーで活躍する水彩画家の存在は、パトロンにとっても、大衆にとっても、そして同時代の水彩画家にとっても、少なからず影響力を持ったはずである。

1812年の『リポジトリー・オブ・アーツ』誌には「英国における水彩画の発生と進展に関する所見」が掲載され、サンドビーの水彩技法について具体的に記された。

> この新しい芸術の要求を克服するための最も成功した試みは、故ポール・サンドビーによってなされた。つまり、大きな紙に、透明水彩の薄塗（ウォッシュ）を均一に塗り重ねたことである。彼がその難題を克服したことで、その後のあらゆる改良への道が開かれた*[30]。

ここで注目したいのは、「大きな紙」と「透明水彩の薄塗」という記述である。なぜならこの2点はまさに英国の産業革命を経て改良された点だからである。英国では18世紀末までに紙面が平滑で丈夫な紙が作られ、大きいサイズの紙も製造されるようになっていた*[31]。また、高濃度、高彩度、微細粒子の顔料が多色にわたって開発され、絵具を水でたっぷりと溶いて紙に薄く塗ることが可能となり、紙の白さを生かして、白色を混ぜることなく明るさが表現できるようになったのである*[32]。サンドビーは確かに、大きいサイズの紙を用いた透明水彩の作品を制作しているが、透明水彩とグワッシュを併用した作品や、グワッシュが主として用いられている作品も多い*[33]。それではなぜ透明水彩についてとりわけ取り上げられているのだろうか。そこには、ハーンやグレッグ・スミスの詳細な研究によって考察されているように、19世紀初頭の水彩画家・水彩画擁護者によるイメージ戦略が絡んでいる*[34]。19世紀初頭、とりわけ水彩画家協会が設立された1804年以降、水彩画を「新しい芸術」として打ち出す記述が多くみられる。たとえば1821年の水彩画家協会の展

覧会カタログ序文でも、水彩の「色彩の力強さ」や「絵具の耐久性」が強調され、それまでの水彩のイメージを覆すような要素が取り上げられている*35。そしてあくまでも紙の白を活かす「透明水彩」の技法に固執し、産業革命によって改良された新しい芸術であることを主張することで、油彩や、大陸起源のグワッシュに対して英国の独自性・新しさを打ち立て、「英国固有の」芸術であることを大衆に向けてアピールしていくのである*36。こうした進歩史的、愛国的に水彩画の発展を語る風潮は、水彩画家協会の創立メンバーの1人であるウィリアム・ヘンリー・パイン（William Henry Pyne, 1769–1843）の「英国における水彩画の発生と進展*37」と題する一連の評論に引き継がれていく。その文脈の中で、サンドビーの透明水彩における功績がとりわけ評価されていった*38。1809年の訃報記事で記されたように、「近代」水彩風景画の父として語られたのである。

おわりに

本稿ではポール・サンドビーに注目し、その「英国水彩画の父」の呼称の基となる19世紀初頭の記述から、そこに当時の英国のナショナリズムの背景があることを確認した。そして英国の風景や画材の発達と絡ませられながら、サンドビーが近代水彩風景画における出発点であるというように語られていた。

最後に、今回取り上げた時期からおよそ100年後の明治期の日本に目を向けて本稿を終えたい。というのも、明治38年（1905）に創刊された水彩画専門雑誌『みづゑ』の第一号に「近世英國水彩畫一斑（上）」が掲載され、そこでサンドビーが詳細に紹介されているのである。3号にわたり英国水彩画の紹介が掲載され、およそ65名の英国水彩画家の名前があがる中で、（上）の記述はほぼ全てサンドビーにあてられており、書き手のサンドビーに対する関心の高さをうかがわせる。ここにその一部を引用しておきたい。

> 水彩畫派の劈頭第一の畫家をポール、サンビー（POULSANDBY）とし、世呼んで英國水彩畫派の父と稱せり。……溯つて考ふれば、かくも今日世間に重んぜらるゝ水彩畫の發達は、百五十年前新説を稱へ、自然の描寫に於て、舊派の畫家の觀察力にては、得て望むべからざる底の大進歩を促したる、ポール、サンビー氏の功勞に歸する事勿論にて、吾人は此光榮ある好果に對して、深く氏に感謝せさるべからず*39。（原文ママ）

本紹介文の書き手は、サンドビーが英国水彩画派の父と呼ばれていることから始め、詳細な説明を経て、今日の水彩画の発達はサンドビーの功労のおかげであると感謝する。日本は当時水彩画ブームの只中にあり、この『みづゑ』は日本における水彩画の啓蒙書の一つであった。同誌第一号の「発行の辞」には、水彩画を学びたいが学ぶ機会の無い人に、技法についての講話や西洋の水彩画の名作を知らせたい気持ちから発行を思い立ったとある*40。そのような日本の水彩画の発展を支える役割と、サンドビーの英国水彩画普及の立役者としての立ち位置が重なり、紹介に熱が入ったのであろうか。18世紀末の英国と明治30年代の日本という、近代化が進む中で風景を描いた画家たちは、自然の微かな移ろいを捉えることができ、持ち運びが簡便な水彩を用いて、自然を写した。その出発地点に、サンドビーはいたのである。

図版出典

fig. RA Collection
https://www.royalacademy.org.uk/art-artists/work-of-art/wenlock-abbey-shropshire-the-south-transept-and-converted-priors-lodge-seen 2021年5月16日

註

＊1　水彩画は、広義には、水溶性展色剤で練った顔料を使って制作した絵画を指し、狭義には顔料とアラビアゴムを練り合わせた絵具で描いたものを指す。（佐々木英也監修『オックスフォード西洋美術事典』東京：講談社、1989年、527頁）この「水彩絵具」とは透層性の「透明水彩絵具」と、被覆性の「不透明水彩絵具（グワッシュ）」の双方を含む概念である（クルト・ヴェールテ『絵画技法全書』佐藤一郎ほか訳、美術出版社、1993年、385頁）。本稿で用いる「水彩画」は狭義の意味で用い、さらに透明水彩絵具とグワッシュ絵具の差を問題にする際にはそれぞれを分けて用いる。

＊2　英国水彩画の通史については数多くの研究書があるが、主要研究は以下を参照。Andrew Wilton and Anne Lyles, *The Great Age of British Watercolours 1750–1880*, (London: Royal Academy of Arts; Munich: Prestel, 1993); Martin Hardie, *Water-Colour Painting in Britain*. (3vols. London, 1966–68).

＊3　ポール・サンドビーの生涯と作品については主に以下を参照。William Arnold Sandby, *Thomas and Paul Sandby, Royal Academicians* (London: Seeley and Co., 1892); Luke Herrmann, *Paul and Thomas Sandby* (London: Victoria and

Albert Museum, 1986).

＊4　第四代准男爵ワトキン・ウィリアムズ・ウィン卿（Sir Watkin William Wynn）や植物学者ジョゼフ・バンクス卿（Sir Joseph Banks, 1743–1820）と共にウェールズを旅した。

＊5　以下を参照。Sandby, *Thomas and Paul Sandby*; Herrmann, *Paul and Thomas Sandby*. 日本語文献では斎藤泰三『英国の水彩画』彩流社、2003年に詳しい。

＊6　Sandby, *Thomas and Paul Sandby*.

＊7　E.H. Ramsden, "The Sandby Brothers in London," *Burlington Magazine* 89 (Junuary 1947); Peter Hughes, "Paul Sandby and Sir Watkin Williams Wynn," *Burlington Magazine* 114 (July 1972); Peter Hughes, "Paul Sandbys Tour of Wales with Joseph Banks," *Burlington Magazine*117 (July 1975).

＊8　*Paul Sandby, 1725–1809*, (London:Guildhall Gallery 1960); *Paintings and drawings by Thomas and Paul Sandby*, (The Reading Art Gallery and Bolton Museum and Art Gallery, 1972); *A comprehensive exhibition of 18th century landscape prints by Paul Sandby, 1725–1809*, (London: William Weston Gallery, 1977).

＊9　A.P. Oppé, *The Drawings of Paul and Thomas Sandby in the Collection of His Majesty the King at Windsor Castle*, (Oxford: Phaidon Press, 1947).

＊10　Julian Faigan, *Paul Sandby Drawings* (Sydney: Australian Gallery Directors" Council with the City of Hamilton Art, 1985); Bruce Robertson, *The Art of Paul Sandby* (New Haven: Yale Center for British Art, 1985).

＊11　Johnson Ball, *Paul and Thomas Sandby, Royal Academicians, Anglo–Danish Saga of Art, Love and War in Georgian England* (Cheddar, Somerset: Charles Skilton, 1985).

＊12　Herrmann, *Paul and Thomas Sandby*.

＊13　Bruce Robertson, "Paul Sandby and the Early Development of English Watercolour", unpublished Ph.D. thesis, Yale University, 1987.

＊14　Jane Roberts, *Views of Windsor: Watercolours by Thomas and Paul Sandby*, (Rijksmuseum, Amsterdam, Portland Art Museum, Oregon, Museum of Art and Whitworth Art Gallery, Manchester, 1995–97).

＊15　Teresa Fairbanks Harris and Scott Wilcox, *Papermaking and the Art of Watercolor in Eighteenth–Century Britain: Paul Sandby and the Whatman Paper Mill*, (Yale Center for British Art in association with Yale University Press, 2006.).

＊16　John Bonehill and Stephen Daniels, eds., *Paul Sandby: Picturing Britain*, exh.cat, (Royal Academy of Arts, London, 2010).

＊17　Ann V. Gunn, *The Prints of Paul Sandby (1731–1809) A Catalogue Raisonné*, (Brepols Publishers n.v., Turnhout, Belgium, 2015).

＊18　*Picturing Places*, British Library, 6 April 2017. https://www.bl.uk/picturing–places　このオンラインリソースは、2013年に始まった大英図書館の研究プロジェクト "Transforming Topography" の成果である。

＊19　今村隆男「ポール・サンドゥビーの二つの風景」『和歌山大学教育学部紀要』70号、2020年2月。

＊20　Huon Mallalieu, *The Dictionary of British Watercolour Artists up to 1920*, 2vols, (Antique Collector's Club, 2002), "Sandby, Paul R.A."

＊21　サンドビーの評価の変遷については、以下の研究に詳しい。John Bonehill, Stephen Daniels and Nicholas Alfrey, " Paul Sandby: Picturing Britain", in Bonehill and Daniels, *Paul Sandby*., 13–27.

＊22　*The European Magazine and the London Review*, (August 1796), 75–76. 一部抜粋。" … and in many of his exquisite delineations, uniting fidelity with taste, the beautiful scenery for which this Island is so eminently distinguished, is displayed as in a mirror. For force, clearness, and transparency, it may very truly be said that his Paintings in water colours have not yet been equalled; the Views of Castles, Ruins, Bridges, & c. which are frequently introduced, will remain monuments to the honour of the Arts, the Artists, and the Country, when the originals from which they are designed are mouldering into dust. …"

＊23　シュロプシャーの州都であるシュローズベリーの歴史的町並みや城、旧ウェルシュ橋は、サンドビーの1770年のウィン卿とのウェールズ旅行以来、サンドビーの作品に繰り返し描かれるモチーフである。

＊24　Bonehill and Daniels, eds., *Paul Sandby*, 155.

＊25　*Public Characters of 1800–1801*, (London: Printed for Richard Phillips, 1801), 462. "From the frequent contemplation of this variety of scenery, a variety with which Great Britain abounds, he has formed a style peculiarly his own, and peculiarly English, and, among the artists and amateurs of this country, deservedly holds a high character for taste and talent."

＊26　英国におけるナショナリズムの高まりと国民意識の醸成については以下に詳しい。Linda Colley, *Britons Forging the*

Nation 1707–1837. Yale University Press, 1992.（リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』川北稔訳、名古屋大学出版会、2000年）

＊27　*The London Review and Literary Journal*,（November 1809）, 400.“At Paddington, Paul Sandby, Esq.R.A., aged 84. His death, notwithstanding his advanced age, is a loss to the arts, and must be regretted by all who had the pleasure of knowing him. He was the father of modern Landscape painting in water-colours, which he carried as far as that kind of painting could, or with propriety, ought to be carried.”

＊28　*The Repository of Arts, Literature, Commerce, Manufactures, Fashions, and Politics*, series Ⅱ, vol. Ⅶ, May 1819, 297.

＊29　リチャード・ハーン「19世紀英国における水彩画」『英国風景画展―マンチェスター市立美術館所蔵英国水彩画』、郡山市立美術館、1993年、17頁。

＊30　“Observations on the Rise and Progress of Painting in Water Colours”, *The Repository of Arts*, vol.VIII, No.47, November 1812, 259.“The most successful experiments to overcome the desiderata of this new art were made by the late Paul Sandby, R.A.; namely, the laying of even washes of transparent water colours upon paper of large dimentions. His surmounting that difficulty opened the way to every subsequent improvement.”

＊31　Theresa Fairbanks Harris, Michael Fuller, and Maureen Green,“Papermaking and the Whatmans”, in Harris and Wilcox, *Papermaking and the Art of Watercolor*, 99, 106. 英国ではワットマン1世（James Whatman Ⅰ, 1702–59）が18世紀半ばまでに均一で平滑な表面をもつウォーヴ紙（網目漉き紙）を発明。その後18世紀末までにワットマン2世（James Whatman Ⅱ, 1741–98）がより大きい紙の製造にも成功。また水彩に適したサイジング（にじみ止め）が施された、分厚く丈夫な紙も製造された。このことにより、水彩画の表現の幅を広げることを可能にした。英国における紙については以下も参照。John N. Balston, *The Elder James Whatman: England's Greatest Paper Maker（1702–1759）: A Study of Eighteenth Century Papermaking Technology and Its Effect on a Critical Phase in the History of English White Paper Manufacture*,（2vols, West Farleigh, Kent, Eng.: J.N. Balston, 1992）; Peter Bower,“'Displaying the Colours to Advantage' The Papers Used in the Oppé Collection”, in *British Watercolours from the Oppé Collection*,（Tate Gallery Publishing, 1997）, 32–37; John Krill, *English Artists' Paper: Renaissance to Regency*,（2nd ed. New Castle, Del.: Oak Knoll Press and Winterthur Museum, 2002）.

＊32　ホルベイン工業『絵具の事典』中央公論美術出版、1996年、133頁；森田恒之『画材の博物誌』中央公論美術出版、1986年、66頁。

＊33　ただし、サンドビーは様々な技法の試みを行っており、透明水彩かグワッシュかというカテゴリーで単純に論じられない作品もある。サンドビーの技法についてはとくに以下を参照。John Bonehill and Sarah Skinner,“'Grand Secrets': Sandby's Materials and Techniques”, in Bonehill and Daniels, *Paul Sandby*, 65–71; Alan Donnithorne,“Media, Paper, Watermarks and Mounts”, in *Views of Windsor*, 138–143.

＊34　ハーン、前掲書、12–31頁；Greg Smith, *The Emergence of the Professional Watercolourist: Contentions and Alliances in the Artistic Domain, 1760–1824*,（Aldershot, 2002）. などに詳しい。

＊35　Society of Painters in Water Colours, *Catalogue of the Exhibition of the Society of Painters in Water Colours*, London, 1821.

＊36　Ibid.

＊37　William Henry Pyne,“The Rise and Progress of Watercolour Painting in England”, *Somerset House Gazatte, and Literary Museum, or Weekly Miscellany of Fine Arts*, Antiquities and Literary Chit- Chatl, 1823–1824.

＊38　ハーン、前掲書、16頁。

＊39　「近世英國水彩畫一斑（上）」『みづゑ』第一号、1905年7月、3–5頁。

＊40　大下籐次郎「發行の辭」『みづゑ』第一号、1905年7月、1–2頁。